

列叙法の二面性とその周辺

森 雄 一

1

佐藤 (1978)、佐藤・佐々木・松尾 (2006)、中村 (1991)、野内 (1997) (2002) といった有力なレトリック書において列叙法というレトリック項目がたてられている。次の文章の下線部がこれらの書でいう列叙法にあたる。

- (1) 尤も大響に比^{ひと}しいと云っても昔の事だから、品数の多い割に碌なものはない。餅・伏菟・蒸鮑・干鳥・宇治の氷魚・近江の鮒・鯛^{すわやう}の楚割・鮭^{こごもり}の内子・焼蛸・大海老・大柑子^{ごうじ}・小柑子・橘・串柿などの類である。(下線は稿者による。以下同様。) 芥川龍之介『芋粥』
- (2) ほっとするよ。いま飛びこめば、もうなにもかも問題でない。借金も、アカデミーも、故郷も、後悔も、傑作も、恥も、マルキシズムも、それから友だちも、森も花も、もうどうだっていいのだ。 太宰治『道化の華』

一般に、よりなじみのある用語に列挙法があり、上の用例は通常の意味での列挙法にもあたる。それでは、列叙法と列挙法は同義語と捉えられているのかといえ、上述の書においては共通して、列叙法を列挙法の上位概念と考えている。しかしながら、その性質についての考え方などの諸点において食い違う部分もあり、まだまだ未整理・未解明のところの多い彩であるといえる。本稿も、列叙法を列挙法の上位概念とするが、列叙法の特徴を (A) 言語の持つ省略性への反逆、(B) 新たなカテゴリーの形成、の二面性を持った彩と捉え、列挙法は後者の側面が前面にでたものとその性質を考える。また、それぞれの特色について他のレトリックとの連関のなかで考えていく。以下、2節では先行研究をもとに列叙法の規定について整理し、その特色を上述の (A) (B) の二面性という観点から考察する。3節では、列叙法の持つ言語の持つ省略性への反逆という側面を考えるが、細かく (詳しく) 述べるということばの彩は、提喩のある種のタイプや中村 (1991) の「詳悉法」と連続していることを示したい。4節では、列叙法の持つ「新たなカテゴリーの形成」という側面について述べる。こちらの側面が前面に出た場合が列挙法であると稿者は考えるが、列挙法についてこのような考え方をとっているすぐれた先行研究である、ビジョー (1997)、多門 (1999) の議論をもとにこの側面の「ことばの彩」性

をおさえ、また、ここでも他のレトリックとの関連を考える。5節ではまとめを付す。

2

この節では上述のレトリック書における列叙法の規定をまず見ていく^(注1)。野内(2002: 89)では、「列挙法も漸層法も語や観念を次々に動員する文彩であり、「列叙法」(accumulation)のもとにくくれる。大きな違いは、同類のものを集める場合が列挙法、異種のものを集める場合が漸層法である。」とし、また、中村(1991: 183-184)は、列叙法を「叙述の途中でまとめることなく、部分部分に同等の力点を置いて次から次へと積みあげる形で念入りに盛りあげる技法」と規定した上で「《列叙法》のうち、同格のことはを並べたてるものを特に《列挙法》として独立させることがある。漱石の坊ちゃんが赤シャツのことを「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わん〜鳴けば犬も同然な奴」とまくしたてるあの要領である。」としている。近年の佐藤・佐々木・松尾(2006: 324)においては、「語句や文をいくつも重ねること。ある対象の細部を次々と描写したり、ひとや対象あるいは事態の性格を多面的に挙げたりして印象を鮮明にし、更には証拠を幾つも挙げていって説得力を増すなどの効果がある。単なる《列叙》と、列挙される項のあいだに徐々に力を高め(たり、まれには弱めたりす)る効果の変化を加味した《漸層》、更に短い語を重ねてスピード感をもたせた《たたみかけ》とに、大きく三分される。」とされている。いずれも列叙法を列挙法の上位概念としているところに共通点がある。また、列挙法と並ぶレトリックとして漸層法があげられている。中村(1991)においては、列叙法のもとに列挙法以外のどのようなレトリックが位置づけられるのかが明確に論じられてはいないが、列挙法ではなく列叙法の例としてあげられた(3)とそれに付された「この《列叙法》は、次にとりあげる《列挙法》と【配列】の技法として扱った《漸層法》の両方の性格が入りまじっていると見ることもできよう。」という記述を見る限り、漸層法的なものを考えているのであろう。

(3) ^{おでこ}額のいやにだだっ広い、目頭に米粒大の目糞をこびりつかせた、そしてそ

注1 列叙法を取り上げた初期のレトリック書として、五十嵐(1909: 281-283)がある。ここでは、「列叙法とは幾多の事物を併せ掲ぐる際に、一つに締め括らずして其の一つ〜に同等の重みがあるやうに列べて寫す詞姿である。例へば、「梅櫻及び桃を愛す。」「月雪花にあこがる。」といふ如く一括りにせずして「梅を、櫻を、桃を愛す。」「月に、雪に、花にあこがる。」と云ひ」のように説明している。規定としては中村(1991)に似ているが、このような例を見ると構文的な特徴を重んじた規定という点で現行のレトリック書の捉え方と異なると考えられる。なお、五十嵐(1909)では、列挙法が項目立てでされておらず、列叙法と列挙法との関係は明確ではない。

の目と目の間がばかに離れていて間の抜けた、大きく下品な団子ッ鼻の、
薄汚れた中年男の顔が大写しになった。 井上ひさし『吉里吉里人』

この例について、中村（1991）は、それぞれの修飾句が同じ比重で「顔」にかかっているが、修飾句が重なるにつれて顔の醜さが次第に強調されるという点で、列叙法と漸層法が入り交じったものだと考えている。重なっていくにつれてくどくなり強調される（これは、中村（1991）が述べるように配列の技術としてのレトリックであろう）ということを除けば意味的に同格のものが並べられる点は、列挙法と共通していると考えてよい。付け加えるならば、漸層法に異質性のみを求める野内（2002）のような見解には検討の余地がある。漸層法は、同質性を基盤にしてそのグレードをあげていくことに主眼を置いたレトリックとして、列挙法の特異な一ケースと位置づけられる可能性がある。

以上、現在のレトリック書における記述をもとに列叙法が列挙法・漸層法の上位概念として位置づけられていることを確認した。佐藤・佐々木・松尾（2006）に先行する佐藤（1978：204）においても「ものごとを念入りに表現するために同格のさまざまなことばを次々とつみあげていく表現法を、まとめて《列叙法》と呼ぶことにする」とし「列叙法を総称とし、そのなかに列挙法と漸層法というふたつの型がふくまれる」と述べるように、上述のレトリック書と同様の捉え方をしているように思われる。しかしながら、佐藤（1978）の列叙法論の重要な特色は、列叙法の特質を単に「同格のさまざまなことばをつみあげる」だけでなく、「現実に対してつりあわない過剰な意味をもつことばを意識的につかう」誇張法が「言語の平板性」に対する抗議であるのに対して、「おびたしい量の意味内容を造形するためにおびたしい量のことばをもちいる」、いわば「言語の省略性」に対する抗議として列叙法はあるとしたことにある。この側面のみを強調した極端な例をあげるならば、「蟻がひっきりなしに通った」といえばすむところを列叙的に述べた次のような表現となろう。

（4） 蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。蟻が一匹通った。……

（4）は、列叙法のある一面をデフォルメしてみせたもので、多くの列叙法にはもう一つの重要な側面がある。「同格のさまざまなことばをつみあげる」といってもその場合のつみあげられた言葉はもともとは異種のものである、それを同質性を持ったと想定して並べたことに列叙法のもう一つの特色があるのである。佐藤（1978）が提示した次のような例を見てみよう。

- (5) 堀川の一条通りに近い空地の、はじめはほんの二、三軒の露店がいったいばしの市場になって、たえず景気のよい売り声をたてている魚屋、八百屋、鍋釜、桶、ざる、箒木の荒物屋から、らしやの合羽、鍔広帽子、縫い取りの手中、ねり玉の頸飾り、と触れこみの南蛮物もいかさまものばかりの雑貨屋、食べもの屋、それに交って呉服屋までが、屋台のまわりにかつと虹がたつほど派手に並べたてた染物、織物、綾、綸子、繻子、緋繻子、なんでもございますので、つい川向こうの西陣を尻眼にかけての商い振りを見せた。
野上弥生子『秀吉と利休』

この例には、列叙法の上記の二つの特色が複合された形であらわれている。下線部の表現は、言語の持つ省略性という性質からは、「染物など」とか「様々な物」とか表現できるものである。それを、個々の事物を並べたてては、言語の省略性への抗議としての彩的性格を醸し出している。と同時に、これらの物を列挙することによって、一つの新たなカテゴリーを形成している。この二面性の両方があるものを列叙法の特色がよくあらわれたものと考え、「新たなカテゴリーの形成」の側面が強くあらわれたものを典型的な列挙法としたい。以下、3節では「言語の持つ省略性への反逆」という観点を、4節では「新たなカテゴリーの形成」という観点についてそれぞれ考察する。

3

2節でみた列叙法の一つの側面は、言語の持つ省略性という性質を逆手にとって、現実にもむしろ即した形で言語化を行い、そこに「違和感」としてのことばの彩を生じさせるものであった。この側面のみが極端な形であらわれたのは(4)でみたような繰り返しの表現である。それほど極端ではないにせよ、本来省略していいようなことをことさらに述べるとやはり「違和感」が発生する。たとえば、「箒を買った」と述べるのと同じ事態を「棚に並ぶ箒から一本を手に取り、レジに持っていき、財布からお金を取り出し、レジ係にそれを渡し、お釣りとレシートを受け取り、箒を包装してもらい、持って帰った」と述べれば、異様にくだい文章となり、そこに違和感としての彩が発生するであろう。同様のことを大堀(2002)は次のように述べている。

例えば、(2)で表されている事態について、現実世界で起きることを高い細密度でイメージしようとするれば、きわめて多くの節点とリンクが必要となる。

(2) 国連が某国を緊急援助した。

細かく考えれば、「国連」と「某国」の間を結ぶ出来事は、例えば次のように考えられる。国連の責任者が指揮官に命令を下し、指揮系統の連鎖を経てパイロットが輸送機を発進させる。そして空間を移動した後、救援物質を落とす。

その物資は某国の特定地点に落下し、任務が完遂される。しかし、日常の言語使用ではこのような細密な連鎖ではなく、もっと簡略な捉え方がされる。つまり、細かくイメージすれば中間に多くの節点をもちうる出来事が、「国連」と「某国」間の直接作用へと還元されているわけである。(大堀 2002 : 99)

以上に述べたことは、中村 (1991) が (6) のような例をもとに「対象を叙するにあたり、そのほとんどあらゆる面を、相手が、あるいは当人も必要以上と感じるほど詳しく述べた場合、それを一つの表現技巧と見て《詳悉法》と呼ぶ。必要以上と認めるわけであるから、この技法がことばの付加であることはわかりやすい。」と述べる詳悉法に通じる。

- (6) 此女の表情を見ると、余はいずれとも判断に迷った。口は一文字に結んで静である。眼は五分のすきさえ見出すべく動いて居る。顔は下彫^{しもぶくれ}の瓜実形で、豊かに落ち付きを見せているに引き易^かえて、額は狭苦しくも、こせ付いて、所謂富士額の俗臭を帯びて居る。のみならず眉は両方から逼^{せま}って、中間に数滴の薄荷を点じたる如く、びく〜焦慮^{じれ}て居る。鼻ばかりは軽薄に鋭どくもない、遅鈍に丸くもない。画にしたら美しかろう。かように別れ〜の道具が皆一癖あって、乱調にどや〜と余の双眼に飛び込んだのだから迷うのも無理はない。 夏目漱石『草枕』

必要以上に詳しく述べることを、以上のような文章のレベルではなく、語のレベルで行うこともある。たとえば、次の (7) の例を参照されたい^(注2)。

- (7) 六時四十分、バスに乗った。各停留所で二人、三人と客が増え、終点の近鉄藤井寺駅前では十七人がバスから降りた。四十二段の階段を上がり、自動改札を抜ける。

六時五十八分、阿倍野橋行きの始発準急に乗った。五両編成の最後尾の車両がいちばん空いている。シートに腰を下ろして乗客を数えると、二十八人いた。制服の高校生二人が扉のそばに立ち、あとの二十六人は座っている。

(中略) 七時十五分、終点の阿倍野橋駅に着いた。下を向いて足許だけを見ながら JR 天王寺駅まで歩き、環状線に乗り換える。一台の車両に吊革が百五十二本、中吊り広告が二十八枚。新今宮から芦原橋、大正駅へいたる沿線の情景は険に焼きついている。 黒川博行「カウントプラン」

注2 この用例については、森 (2004) で「数の提喩」の例として提示し、森 (2008) ではミステリ的な表現効果の観点から詳しい分析を行った。

1996年度の日本推理作家協会賞を受けたすぐれた短編ミステリの一場面である。これを読む我々はかすかな違和感を感じる。普通ならそこまで細かく述べる必要のない数が言及されているからである。「すなおに」概数で表現すればいいところを細かい描写を与えることによって違和感をもたらしている。この小説では、最終的には視点人物の特異性を説明することによってミステリ的な決着をもたらすのだが、この部分では読者に対して通常表現とは異なるという印象を与えることに成功している、効果的な「彩」になっているといえるだろう。

同様に、数を細かく挙げるレトリックとして佐藤・佐々木・松尾(2006)は「過精密」というレトリックを設定し、次のような例をあげる。

(8) この赤井御門守さまのお高は十二万三千四百五十六石、七斗八升九合、ひとつかみ半分三粒というお高でございます。

(三代目三遊亭円遊『粗忽の使者』)

このような表現、同一対象をより細密なレベル(下位カテゴリーのレベル)で述べたり、大雑把なレベル(上位カテゴリーのレベル)で述べたりする(呼びかえていく)のは、提喩(シネクドキー)というレトリックの一つのありかたである。この場合は数に関わる提喩が列叙法的な性格を伴っているといえよう。

4

3節で述べたのは、列叙法の必要をこえて述べることから生じる彩的な側面(佐藤が「言語の省略性への抗議」と述べたもの)であった。この節では、ことばを重ね合わせることによって生じる彩的な効果というもうひとつの側面について述べたい。(9)(=(1))の例は、具体例の提示であると同時に、「ある時の饗宴で提供された食物」というカテゴリーを示している。また、(10)の例は、「長2度あがりの音程で表現される」音というカテゴリーを示している。

(9)(=(1))尤も大響ひとに比ひしいと云っても昔の事だから、品数の多い割に碌なものはない。餅・伏菟ふくと・蒸鮑じょうぼう・干鳥かんとり・宇治うぢの氷魚ひょうお・近江ひょうおの鮎あゆ・鯛すわやうの楚割すわやう・鮭こごもりの内子うちこ・焼蛸やこう・大海老うみえび・大柑子おほかん・小柑子こかん・橘たちばな・串柿くわしなどの類である。

芥川龍之介『芋粥』

(10)(長二度あがりの音程は一執筆注) なにしる豆腐屋さんの「ブー」の音程です。《おてもやん》の「おてー」の音程です。竿をかついでやってきたオッサンの「きんぎょーえ、きんぎょ」の音程です。素人のど自慢で、鐘が二つだけなるときの「トン・テン」の音程です。

佐藤良明『J-POP 進化論』(平凡社新書)

いずれも新たに形成されたカテゴリーである。このような新たなカテゴリー形成による修辞形式は日本文学の伝統の中にもあり、「物尽し」と呼ばれる。同格の表現を積み上げていくことによるカテゴリーの形成という点で、列挙法と物尽しは同類の修辞形式であるが、列挙法が句や様々な品詞において成立するものであるのに対し、物尽しは名詞を重ねることが中心にあることに違いがある。古代から現代までの日本文学作品に出現する物尽しを縦横に論じた、ピジョー（1997）では、列挙法に対する物尽しの独自性として、時代とともに発展していったこと、通常は無関係と思われるものの間に共通点を見だしそれらを寄せ合わせていることの二点をあげている。この後者の指摘は、新たなカテゴリー形成を当然伴うものである。たとえば、ピジョー（1997）があげる次の（11）の下線部の例は一見奇妙なものであるが、「秩序のシンボル」というカテゴリーを表していると考えれば、このような挙例をすることに納得がいくものであろう。

- (11) しかし、戦いが終れば、武器はかえって手足まといになる。秩序というやつがやって来て、自然のかわりに、牙や爪や性の管理権を手に入れた。そこで、性関係も、通勤列車の回数券のように、使用のたびに、かならずパンチを入れてもらわなければならないことになる。しかもその回数券がはたして本物であるかどうかの、確認がある。ところが、その確認たるや、秩序のややこしさにそっくり対応した、おそろしく煩瑣なもので、あらゆる種類の証明書……契約書、免許証、身分証明書、使用許可証、権利書、認可証、登録書、携帯許可証、組合員証、表彰状、手形、借用証、一時許可証、承諾書、収入証明書、保管証、さては血統書にいたるまで……とにかく思いつく限りの紙片れを、総動員しなければならないありさまだ。

安部公房『砂の女』

また、ピジョー（1997）では、正岡子規『病牀六尺』に記された次のリストに、表現の面白さを見ている。これも「新しく我を慰めたるもの」という臨時的なカテゴリーの形成が読者に表現の面白さをもたらすのであろう。

- (12)
- 一、果物彩色図二十枚
 - 一、明人画飲中八仙図一卷（模写）
 - 一、靄崖画花卉粉本一卷（模写）
 - 一、汪淇模写山水一卷（模写）
 - 一、煙霞翁筆十八皴法山水一卷（模写）
 - 一、桜の実一籃
 - 一、菓子麵包各種

一、菱形走馬燈一箇

以上のビジョー (1997) とは独自に、多門 (1999) は、枕草子の「物尽くし」章段 (類聚章段) をレトリックの観点から分析している。たとえば、次の (13) を題材にして、類似性をもとにメンバーを列挙することで新しいカテゴリーの形成を見て^(注3)、そこに表現者の比喩的発想を認めることができると考えるのである。

- (13) すさまじきもの。昼吠ゆる犬。春の網代、三四月の紅梅の衣。牛死にたる牛飼、乳児亡くなりたる産屋、火おこさぬ炭櫃・地下炉。うち続き女児生ませたる。方違へにいきたるに、あるじせぬ所。まいて節分などはいとすさまじ。ひとの国よりおこせたる文の、物なき。

『枕草子』(新潮古典集成上 62)

以上、ビジョー (1997)、多門 (1999) に述べられているように、列挙することの彩的性格は、新たなカテゴリーの創造という点にあった。この観点は他のレトリックともつながる。多門 (1997) では、列挙したメンバー間に類似性を認めている点に表現者の比喩的発想を認めることができるとしている。直喩や隠喩との類似性をこのレトリックに見ているということだろう。また、これはアドホックなカテゴリーの形成ということに関し、提喩の一部のタイプとも関係する。提喩^(注4)には、通常のタクソノミーを利用した提喩だけでなく臨時設定タイプの提喩 (アドホックカテゴリーに関わる提喩) も存在する。たとえば、次の (14) では、上位カテゴリーで下位カテゴリーを置き換える「呼びかえる提喩」となっているが、これは通常のタクソノミーを利用したものではなく、臨時に作られた「白いもの」カテゴリーをその下位カテゴリーである「雪」で置換したものである。

- (14) 堅田の浮御堂に辿り着いた時は夕方で、その日一日時折思い出したように舞っていた白いものが、その頃から本調子になって間断なく濃い密度で空間を埋め始めた。
井上靖 『比良のシャクナゲ』

また、下位カテゴリーで上位カテゴリーを置き換える「代表させる提喩」としては、次の (15) のような例があるが、この場合も臨時に形成されたカテゴリーをもとにしている。

注3 多門 (2001) では、形成されたカテゴリーの臨時性の強弱の差が枕草子類聚章段のなかにあることを考察している。

注4 提喩の種類分けとその種類各々の性質については森 (2002) で考察を行った。

- (15) a. 私の周りは冬彦さん (=マザーコンプレックスの強い若い男性) ばかりだ。
 b. 夫婦共働きもマスオさん (=妻方の両親と同居する夫) 増加の原因である。
 多門 (2000)

稿者は森 (2003) において「AはBの代名詞」という形式をもとに明示的提喩・換喩形式というレトリックについて論じたが、このレトリックも臨時的なカテゴリーに関わる。次の (16) では、「砂」が「清潔の代名詞」とされている。これは「清潔なもの」カテゴリーが形成されそのなかの代表的なものとして「砂」があげられるという奇抜な表現である。

- (16) 「まさか！」男は、口をゆがめて、乱暴に言い返した。自分のなかにあった砂のイメージが、無知によって冒瀆されたような気がしたのだ。「ほくは、砂のことにしちゃ、これでも、ちょっとばかり、くわしいんでね……いいですか、砂ってやつは、こんなふうに、年中動きまわっているんだ……その、流動するってところが、砂の生命なんだな……絶対に、一カ所にとどまってなんかいやしない……水の中だって、空気の中でだって、自由自在に動きまわっている……だから、ふつうの生物は、砂の中ではどうてい生きのびられやしません……腐敗菌だって、その点は、同じことです……まあ、言ってみれば、清潔の代名詞みたいなもので、防腐の役目はするかもしれないが、腐らせるだなんて、とんでもないことだ……まして、奥さん、砂自身が腐るだなんて……第一、砂ってやつは、れっきとした鉱物なんですよ。」
 安部公房『砂の女』

以上に提喩、明示的提喩との関わりで列叙法の一つの特色である新たなカテゴリーの形成ということを見た。もう一つ、あまり取り上げられないものであるが、「異質連立」というレトリックを見ておこう。佐藤・佐々木・松尾 (2006) で取り上げられているもので、カテゴリーの異なるもの (典型的には抽象物と具体物) を結合する表現である。(17) の例は、佐藤・佐々木・松尾 (2006) による。

- (17) 私のところに鍋も釜も茶碗も箸もないというので食事道具一式ぶらさげ、女房も子供もオシメもつれてやって来て、変てこな料理をこしらえて食べさせてくれて
 坂口安吾「ぐうたら戦記」

「つれてやって来る」ものというカテゴリーを臨時的に形成しているのであるが、それにふさわしくないものである「オシメ」を「女房」と「子供」に無理矢理並べ立てたところに表現の面白さが発生している。これも新たなカテゴリー形成がもたらした彩であるということができよう。

5

以上、本稿では、列叙法というレトリックの「言語の持つ省略性への反逆としての言葉の彩」と「新たなカテゴリーの形成に関わる言葉の彩」という二つの面を考察した上でそれぞれと関わるレトリックについて述べた。列叙法も含め、さまざまなレトリックをレトリック全体の連関のなかでとらえていくことが今後の大きな課題である。

付記 本稿は成蹊大学中期研修制度（2012年度後期）を利用してなされた研究の成果である。

参考文献

- 五十嵐力（1909）『新文章講話』（早稲田大学出版部）
 大堀壽夫（2002）『認知言語学』（東京大学出版会）
 佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』（講談社）
 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大（2006）『レトリック事典』（大修館書店）
 多門靖容（1999）「例示・参照域・修辞意識に関する覚え書」
 『表現研究』70号 pp.34-40
 多門靖容（2000）「変異・複合タイプ比喩をめぐって」
 『愛知学院大学紀要』29号 pp.103-116
 多門靖容（2001）「類聚章段の思考—枕草子の感性」
 『表現研究』94号 pp.17-24
 中村 明（1991）『日本語レトリックの体系』（岩波書店）
 野内良三（1998）『レトリック辞典』（国書刊行会）
 野内良三（2002）『レトリック入門』（世界思想社）
 ビジョー、ジャクリース（1997）『物尽し 日本のレトリックの伝統』（平凡社）
 森 雄一（2002）「提喩研究の新展開—非対称性を中心に—」
 『表現研究』76号 pp.15-22
 森 雄一（2004）「問題群としてのレトリック」
 成蹊大学文学部学会編『レトリック連環』（風間書房）pp.61-83
 森 雄一（2008）「隠しつつ見せることについて」
 成蹊大学文学部学会編『ミステリーが生まれる』（風間書房）pp.161-181

（もり・ゆういち 本学教授）